

沼華結縁心

初篇  
全

ル 4  
4961



4961

浪華

浪

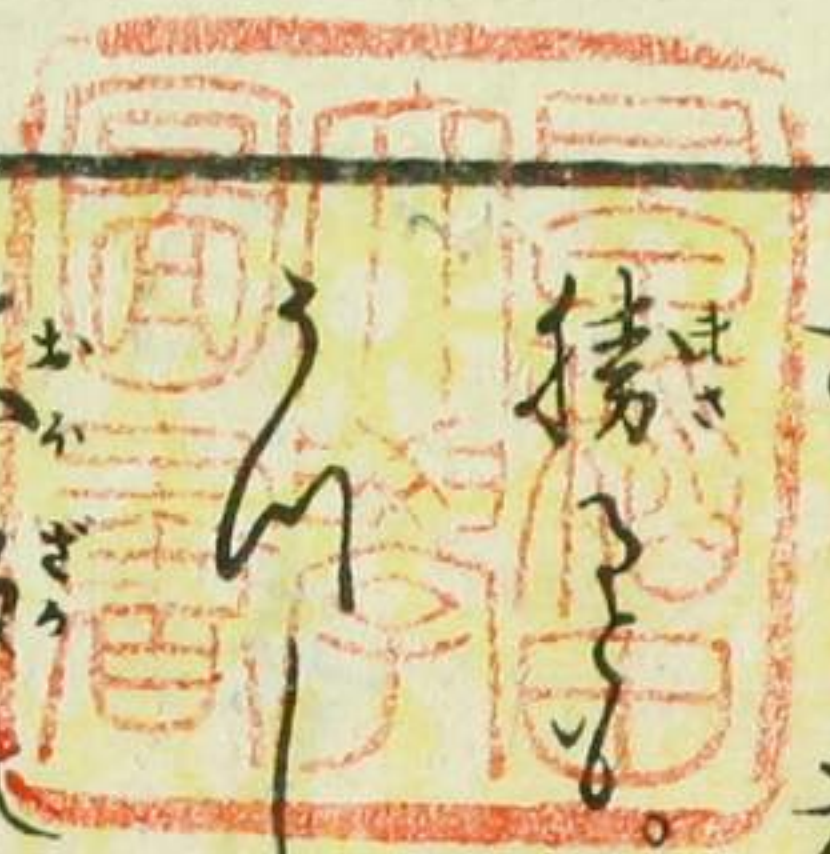
乃

祀

天王寺于蕪



高津造花



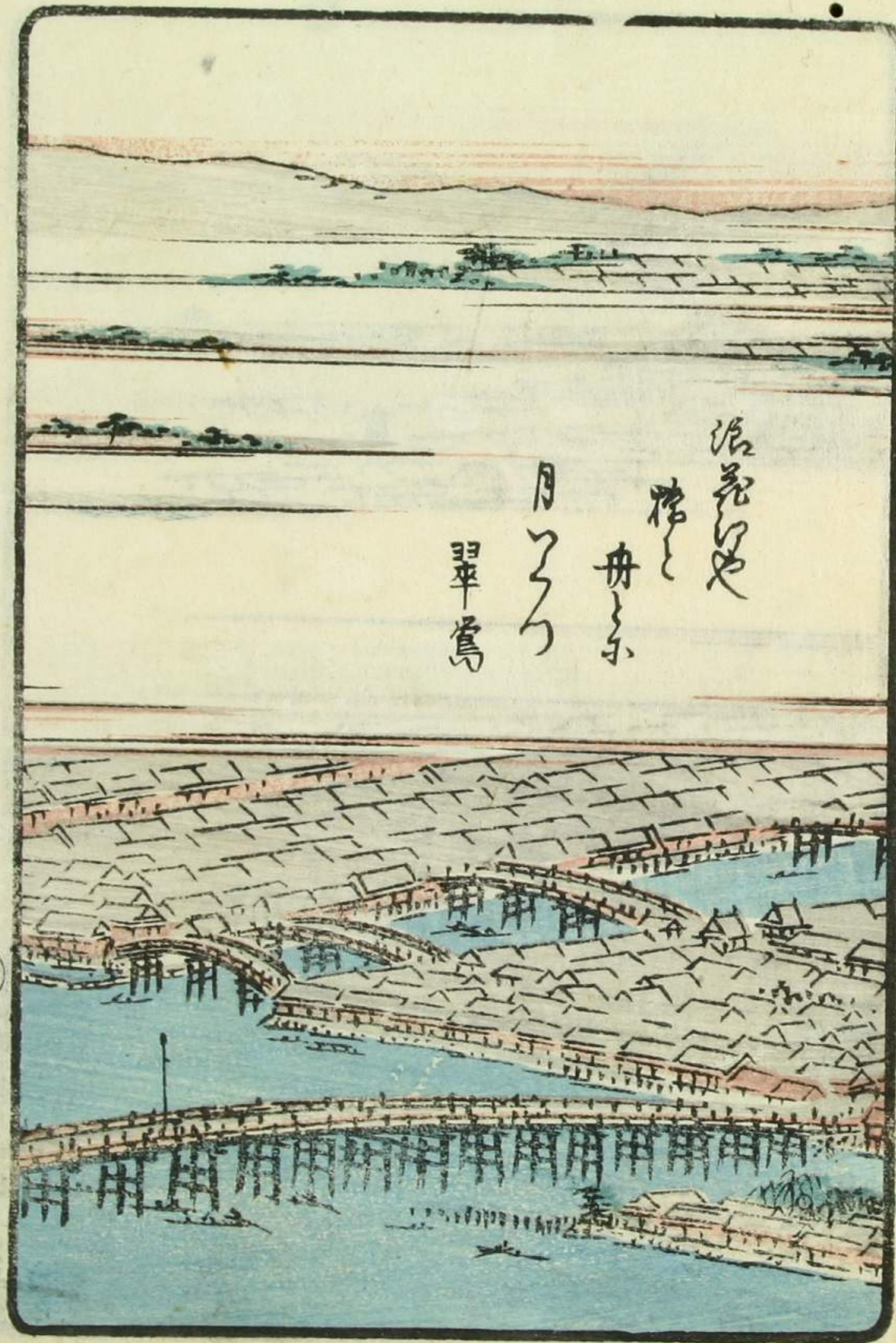
むす社浪速因令といはれ多あへハ京原に  
揚子。考るるに。ぬ。整昌此形状は。弦に  
る。其所以字。知も。と。し。ぬ。素  
大阪に。考るる。際。に。次。此。抄。揚。墨。吉。や。  
龜井。漲。類。天。王。寺。春。此。物。の。揚。文。  
秋。乃。夕。此。賦。山。海。で。遠。家。か。た。た。り。ま。の  
道。標。之。園。夜。虫。燈。より。程。あ。は。は。此

病おちの筆ふで次ついでとび哉。はくこれ終まて吾わが婦ま乃  
美みとけしやぐこれ小過せがる家いづと  
あ〜と。彼こち此こち人の親おやや〜と見  
ぬ

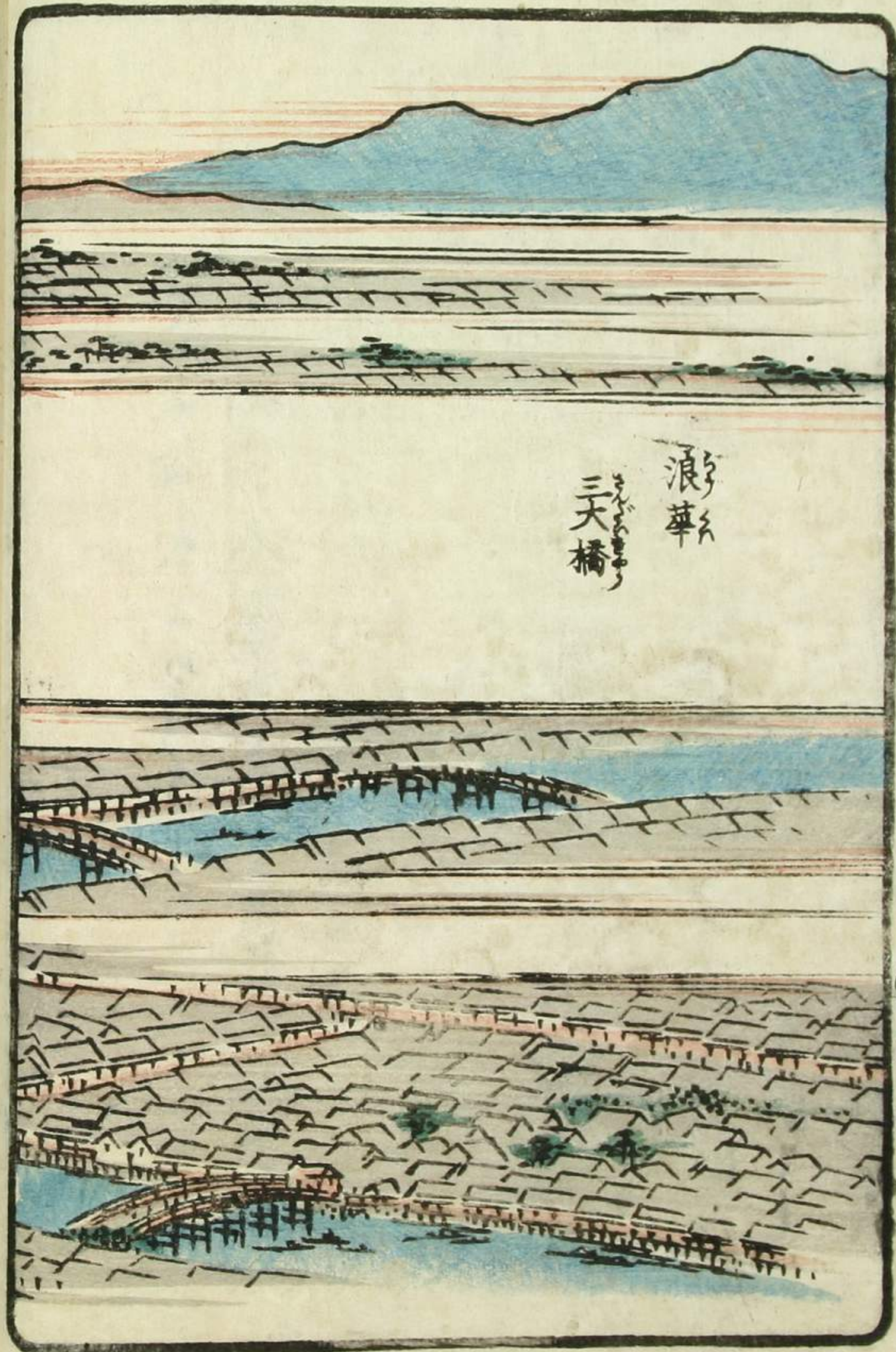
嘉永四年む川ま

保孫太 山川正宣後

歳とし慮しるも 少すく死しま ちやん  
春はるの 色いろかま〜  
くまのふとよのほろりて  
とれらの侍侍装装のま〜とあそ  
今も程



浪華の地  
舟系  
月々々  
翠鳥



浪華  
三天橋

乃三

初二



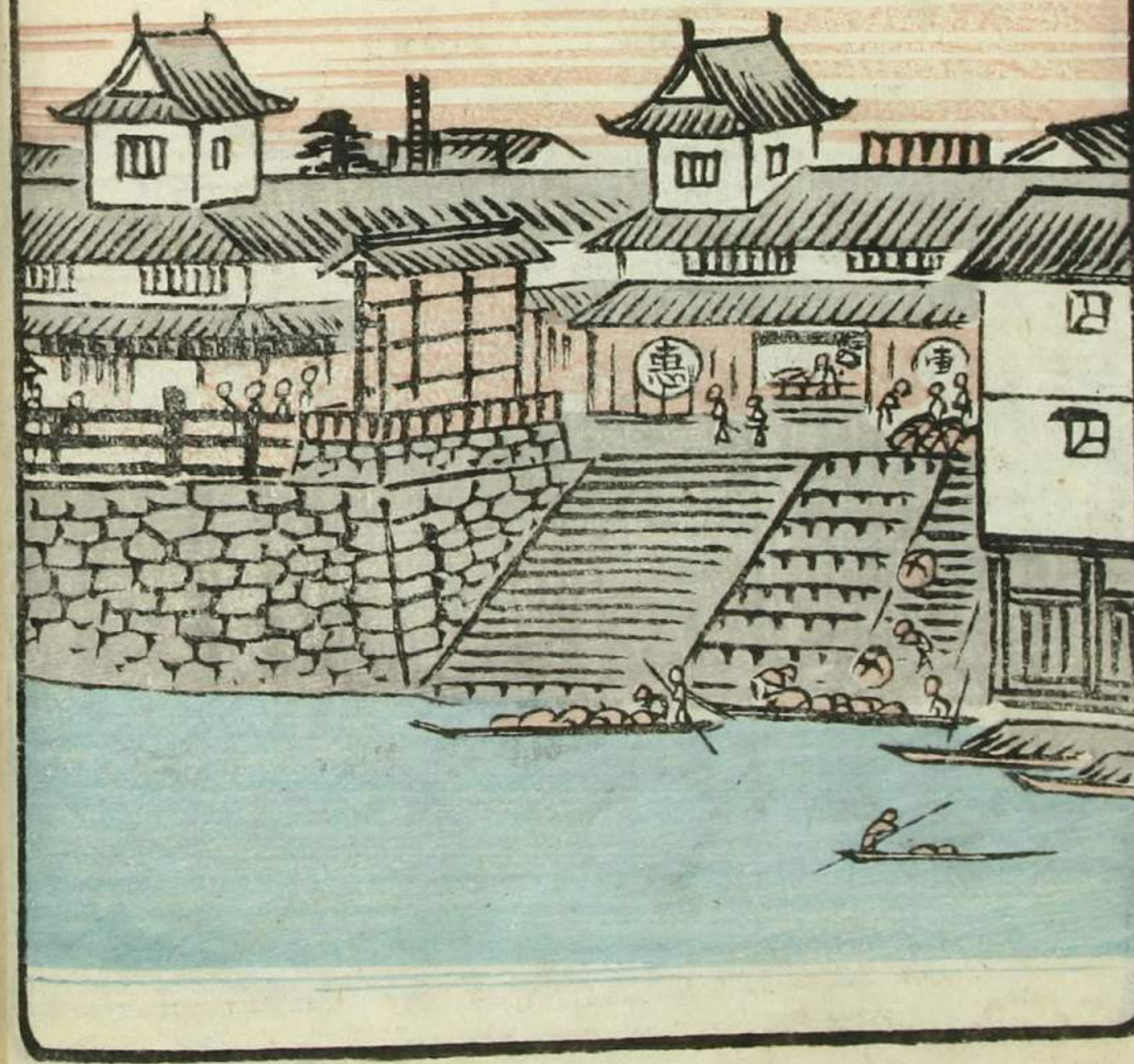
乃  
日



乃  
日

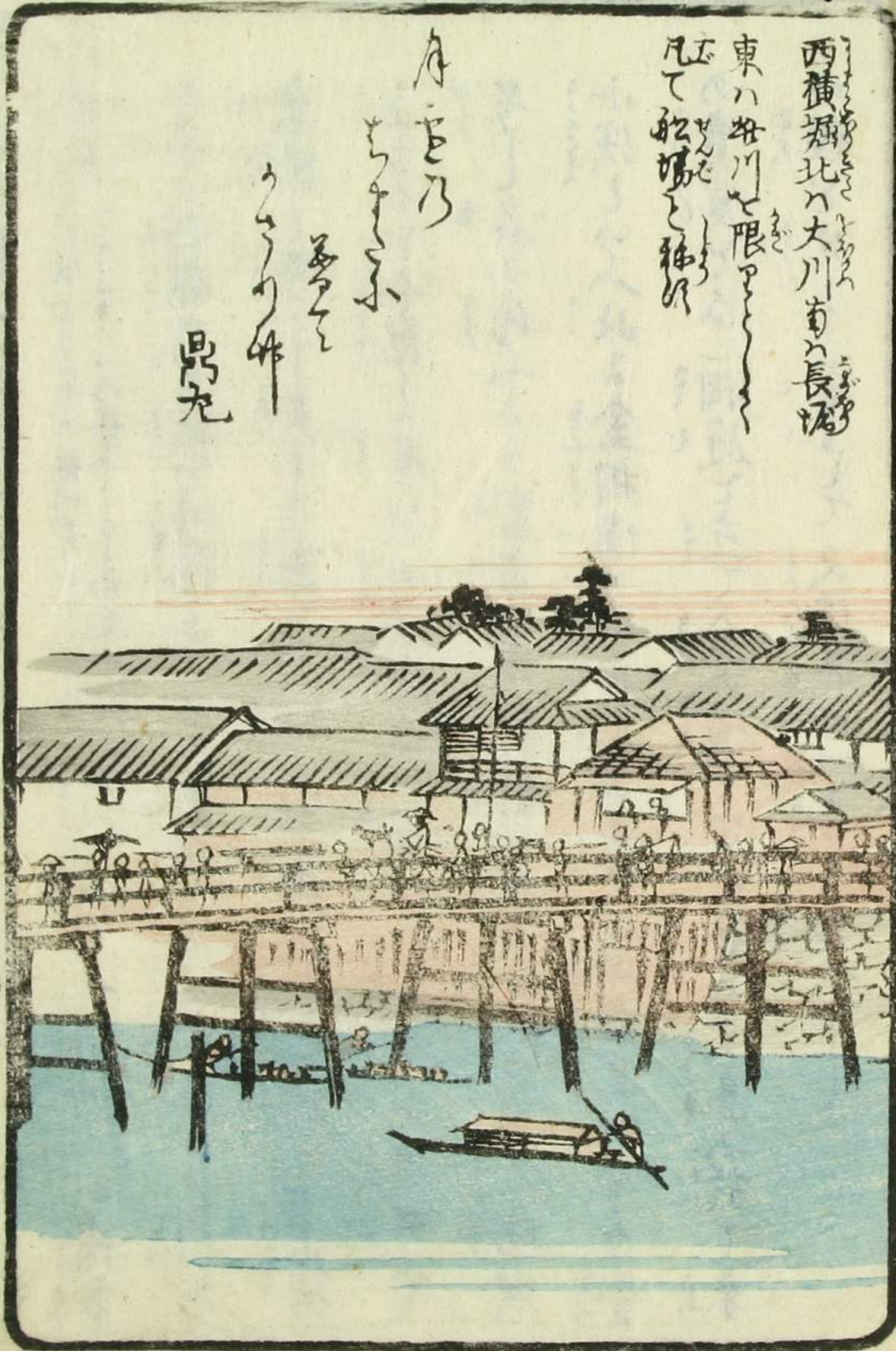
高麗橋

當橋詰の左右小城郭の  
 ひしれ矢倉のり号けく  
 矢倉屋敷といふ又源をじ  
 平野町の角あもかろのり  
 櫓のり浪花市中の奇観し  
 えて恵比須屋の呉服店を  
 ちめ玉露堂の園扇店  
 岩城三井の呉積虎屋  
 伊織の菓子店其外種々の  
 高家軒とるふ交易の賑  
 うくあり賑々此地西の



高麗橋

西横堀北の大川南の長浜  
 東の堀川と限る  
 凡て松坂と梅の



舟を乃  
 うきり舟  
 舟丸

高麗橋

東堀ふりせり井川と十三橋の内川上凡そ大坂よりして諸方

小至る行程の里数と此橋よりして定むる成例といひあはれ川と

東堀と号し是より東と上町といふ西と船場と称す此橋の上

上よりと今橋と号し此橋條の船場は方と俗に肉町と

号し名小岡へする富家豪家軒と烈ぬ又は辺より北戎

小浜といふ此は金相場として日毎は市中の両替屋ゆかり金

の賣買とはし相庭と立て金の價と定む是は堂島ふ於て米

の價と定るとは異にして又浪花の一奇といふべし

神明宮

高麗橋東詰より東南俗に平野町神明と云所祭三坐

中央天照皇太神左八幡宮右春日明神例祭六月十六日

九月十六日より毎月一六日の夜系詣群と云足より

諸賈夜店と出で賑ぐ事夥し

天神橋

淀川と大川を架せり川上より第二の大橋之長サ百二十二間三尺

當橋の南詰より東に至るは八軒家の船着ありて京師への

通船朝夕は出入ありて最賑しく所謂三十石の秋船並船今

井舟の朝船おるりされば下の客小支度進る舟高上客集る



八軒家



八軒家

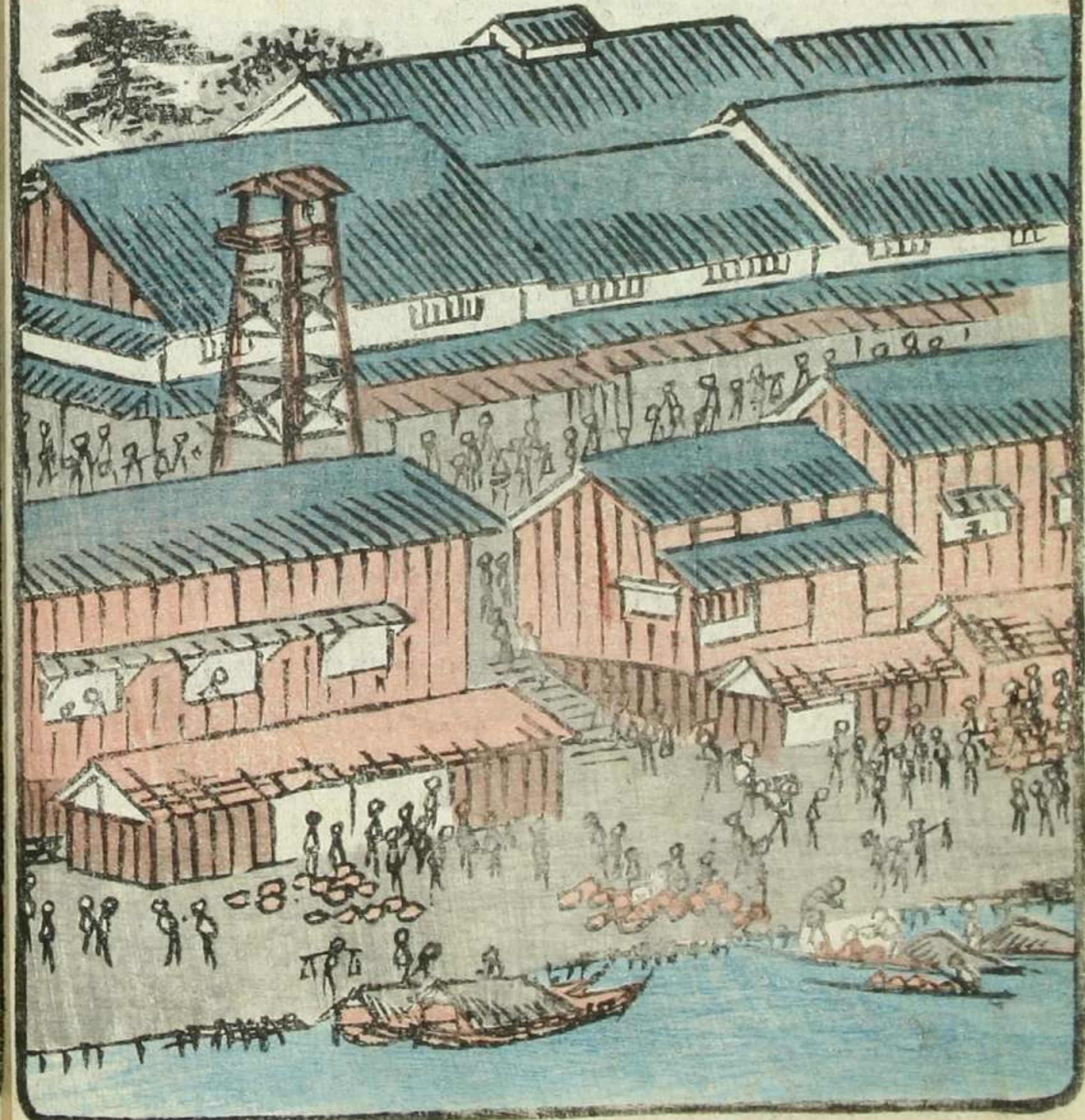
天神橋

八軒家



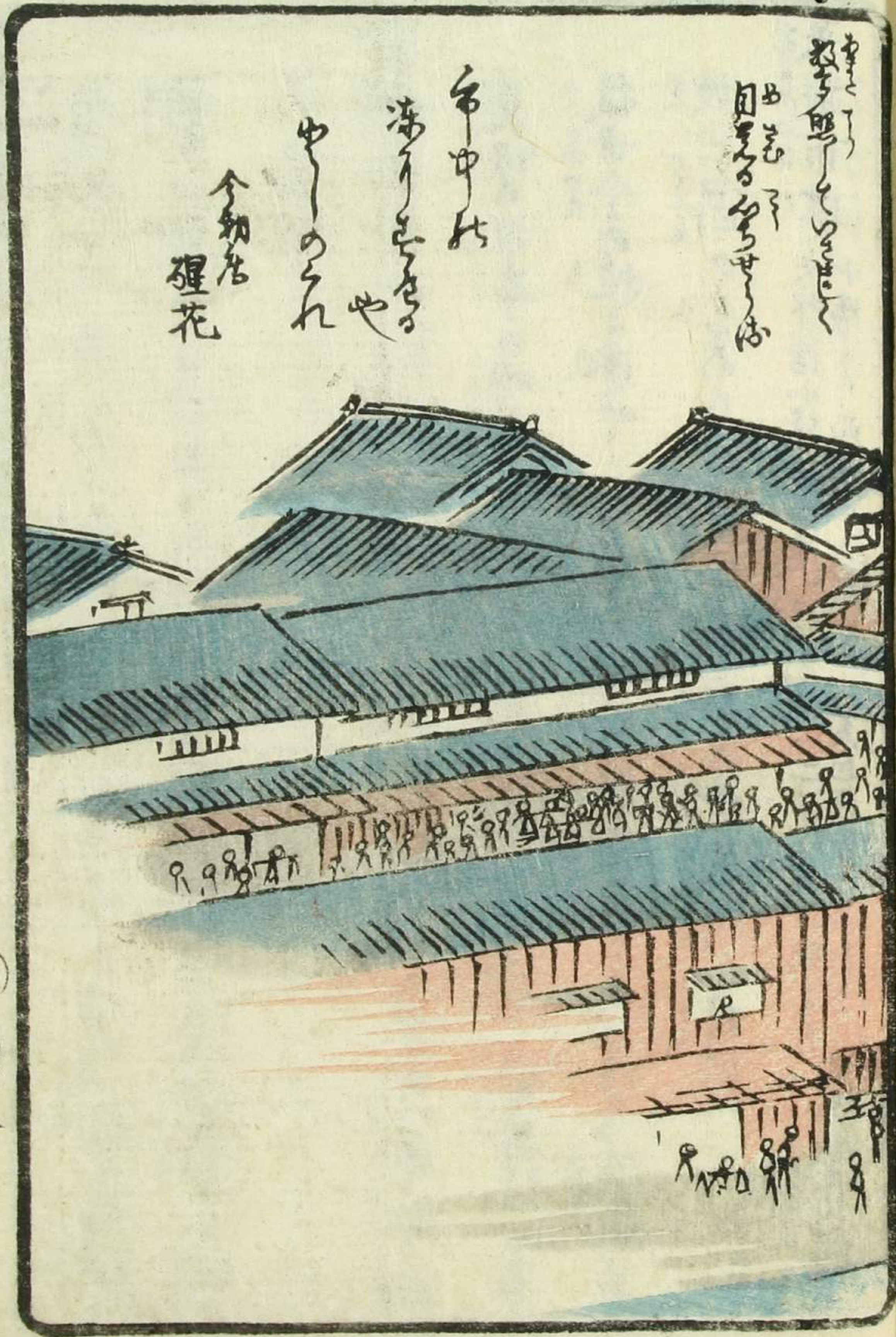
天満菜蔬市

此市場の日々朝菜  
 数々の商人あつて  
 菜蔬を賣買する  
 ものの海がにこれが  
 此の菜の葉菜より葉の  
 葉の葉菜ふり  
 中では手とりぬき  
 別の秋の松茸  
 栗の葉の密柑市  
 夜の市やては桃灯と



中では手とりぬき  
 別の秋の松茸  
 栗の葉の密柑市  
 夜の市やては桃灯と

今知店  
 醒花  
 中では  
 海りとも  
 や  
 中一のそれ



船次陸下荷着る馬子。何り声高小罵るれば。船主は切の  
袂きと口角衆あつて。終日静たう事あり。繁昌の産  
とつて

座摩宮舊趾ハル家の上石町の辺より例年六月二十二日座摩神社

夏秋の神事の時神輿此所へ渡御あり。往古此地小鎮座ありしが  
後世今の地へ遷せし。今尚御鎮座石と云ふあり。此石は  
故小石町の名ありと云俗は座摩の所産所と称し

菜蔬市場天神橋北詰より車へ渡り通三丁より西の間の間原此市場へ

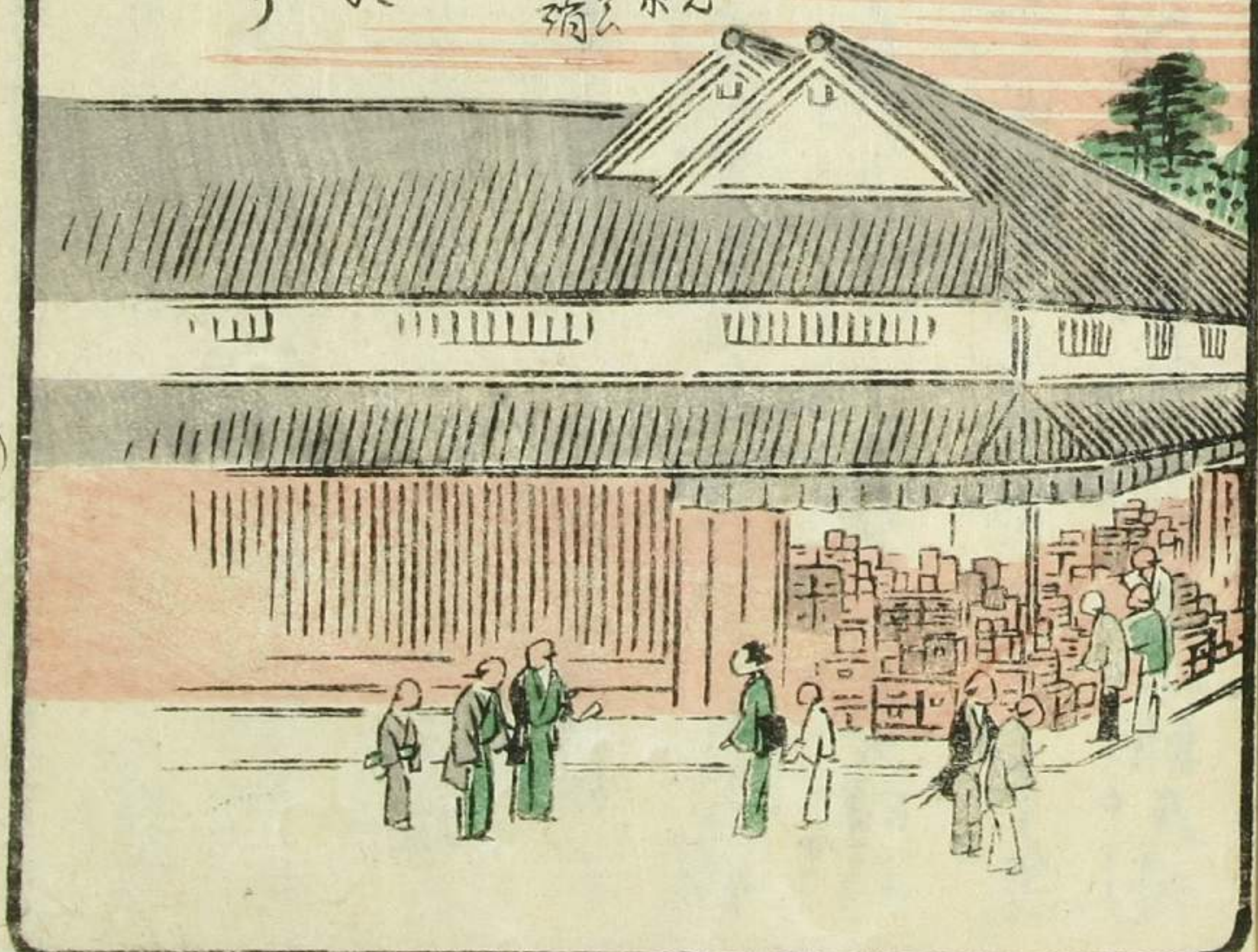
京橋南詰小松年々く育し。慶安の頃其地御用地  
とありて京橋庁原町へ引移り。然るに商人の往来小煩ひ  
ありとして替地と免され。今の所へ移りしより日々小店と  
飾り賣買市人鳥の如く小集ひ。鮮の如く小萃り。賑り  
事。常小なむ事あり

天満天神社天神橋通より一丁東の條正面あり此地と天満と号し

事ハ天満大自在天神鎮座より小故あり。所奈本社中央より  
大自在天神相殿の東より手力雄命法性坊尊意西より猿田彦

天満天神

菅神の聖廟多々存中別て當社の  
 他不起て灵験ありたるより遠近の  
 貴賤常々詣りて向断り社頭の繁  
 栄浪花第一とて例月廿五日奉請  
 群衆あり就中正月の初天神とて  
 詣人往來の道より満ち錐と立ち此  
 寸地より莫く知れぬ大坂日守り



天満宮

大神おほいのかみ蛭兒尊ひるこのみことホるり。其余境内小末社多し。畧之。此地ハ往昔  
 北西小續きたにしよきうま松原まつがらるりしが人皇六十二代村上天皇天曆年間  
 神託しんたく小やかせ勅願ちうくわんのつゝ建辛けんしん給たまは所ところなりとて故ゆゑ天神てんじんの  
 松原まつがら或ハ天神てんじんの森もりるど古書こしよ小見こみへりりる程ほど小靈験しんげんのつた  
 る事ことハ四侍しよしの諸人しよじん間判まはんりて遠近えんじんより雜集ざしやくハ社内しゃうちうハ昔むかし勅  
 或ハ軍書ぐんしよ講釈かうしゃくの小屋こや地上ちのうりて致いた下くだ降くだ品しん玉たま輕業けいごうハ藝時げいじの  
 唱哥なうかの讀賣よみうり其餘菓子類こゝろ手遊具てあそびぐの出店いしでんるる地ちせんまを  
 烈はげりて朝暮あさぐの蟹かに島しまのり方かた也なり門かど亦またりて貸食かじ家か煮賣にうり店てん鮎屋あゆや饅頭まんじう

頭木菓賣かぶき珍器めづかし奇物きぶつの高家軒たかかたとるるど數販かずはんとて饒にぎはりて  
 皆管神みなくだんの余光よしみとつゞげし例れい奈六月廿五日ハ銚流しやうりゆうの神かみ支し  
 と早はやして神輿かみこ戎島えいじまの行宮ゆきみや小渡御こわたごあり其壯觀そのさうくわんの美景びがみるる  
 事ことハ世よの昔むかし見聞みきこする所ところ也なり浪花なみ第一だいいちの賑にぎひなり  
 菅原山天満寺すがはらやまてんまんじ天神てんじんの社地しゃぢのやまあり天満てんまんのありとつ  
 鎮ちん糸いとハ相傳あひつたる菅神すがかみ影向かげむかひの時ときもあそ此こゝハ法ほふ屋やに  
 とつふ神像しんざう長七寸ちやうしちすんをかり殊勝しよかつなり  
 惠美須社ゑみすぢ寺てら町の西にし寺てら所ところ傍かたの西にし宿しゆくあり新あらた糸いと蛭ひるこ子こ尊のみこと左ひだり少すく彦ひこ名な

堀川

當川條の旧戎の社より凡  
 二丁余して堀田より程一里の  
 辺に華茶とて多く積て恰も  
 山のてくさる故に俗おりの山  
 号けし是昔の地なり  
 是より東に流川とて  
 新子穴鑿りてせられしより  
 大河の清水通下其流  
 業は堀り橋の本と極  
 つれ且通航のすま  
 此の流の源は遠との



老若あに集ひ人  
 墨客お群て幽雅と  
 賞に

實其始と知り

ののれ其所よわ  
 哉と歎ふむりの  
 景地とるわ



命右太玉命三座あり

女夫池田趾 十丁目より先の山 一説ふ此地は始池ありて朝未池

と称す 後世其側より又一ツの池と掘て双と成り

より土人女支池と言ふ 撰陽群談ふ異説ありとも畧す

然るに近未堀川條と新鑿ありて淀川に流れて通

じろふより女夫池町は橋と架して女夫橋といひ池の

埋りて平地となりおふ能勢侯の邸と建られ門

内の傍ふ妙見尊と勧請あり是は摂別野間村妙見

山の本尊同射の靈像ふまゝ白やの靈験とて新築され

貴賤常に詣りて同新す別々午の日の御縁日也

とて系諸點し

木村堤 源八の渡場より 此地は淀川とて西岸ありて堀川小

通じり流水の樋口あり是よりして下の川原より橋の並樹つら

るりて弥生の花盛る老若く遊覧して孰と傾け破子と

剛と奇よみ詩と作り今様と諷ひく最ふざり殊更公堤

を橋の宮ふ對したまふ東の岸も爛熳する花の景色淀川は

在満寺

天海十丁目まじりの  
山あり南長柄と

當寺の休鐘の

長州彦より奇附や  
原の唐土の器あり  
大平十年二月云云



又境内ふる松の大樹  
巧くて花の盛みち  
幽雅して移人喜ぶ  
おむれて風流をそと

中ノ一ふあり

つりし多羅

柳亭  
翠鸞

流るるに映りて吉野嵐山も余可なりは覺ゆ

川寄御宮 天満川寄あり 國花集云元和年中松平下慈守

匡清彦創建し三江和尚寺勢一 建國寺と号し禪

宗洛陽 建仁寺に属す云 御例系四月十七日此日難人の

系流と許しし御本殿の莊嚴結構を申も恐るるはり

御境内の觀音堂藥師堂能舞臺あり社頭より榎樹数株

ありて花の頃ハ殊更小美觀なり

天満橋 御宮の西の傍は南あり 淀の大川筋又松川古大和川平野

川橋間川亦合流して其小落合へ橋長と百十五間五尺と云

往古此南の岸の傍辺と大和の岸といひ半由橋と大和橋は

間は橋と架して大和の橋といひ或は渡辺の橋とも号し

のつと其時ハ川幅廣くして貳百六十間余ありとぞ

京橋 天満川に有結と云ふ御宮の川橋を松の下といふ 故大和川橋間

川合流して橋下より大川入南ハ金城ありて登城の御橋

あり榎檻葱宝珠の銘ニ云元和九年造立と鐫りしは

東へ斤原町相生町とて京師往還の街道なり



京橋

此橋は水倍ふらふら  
朝毎に川奥の

市あり

鯉 鮒 鰻 鱈 鮎 泥鰌

筆とてなる河洲のあつち

魚と持より交易ありき

最まきり

松中薬と以て市の

物とるに

遅く来りて市の

者と困魚の間も合はれ

ひらひら世は常言ふ

軒ふあられて間よ

合はれお

はらへ言ふ

せうせ

金城の春小

輝もすけ魚

八千房

其山



金城

京橋の南方小あり大手御門ハ西向して東堀ありてハ思業橋より之故ニ此通と大手とトと号し南と云道は舟と云を舟小と云京橋といふ

攝陽群談云金城ハ東生郡大坂王造岸小あり云

七竇の初土申小朽ば火も焼くと彼ら比固く以て世儀

合城と祝し奉る云云城郭の結構守護の厳重ハ申も

恐き多し城外の風景もと更ニ美觀なり二月初年の日ハ

貴族老若群集し遊宴に尚室らりくふ雲雀さくはる

頃ハ此小まつて飲樂とて日くやと賑はれ事ひとふ

太平の御恩澤仰ぐべし尊ぶべし

網島

糸塔の北端ありて母地ハ淀川の堤ありて後家烈王常ニ此

新堀小網と于申那ハ号け池ありて前ハ淀川の流

繁く難波津の通船釣船網舟遊具の屋形船とて往来

馳よ東ハ生駒掠が嶺志貴葛城ニ上嶽皆見へりてり

四時より日影暮る故小富家の別宅雅人の閑居風流

貨食家ホありて頗る遊樂の雅地といふべし

大長寺

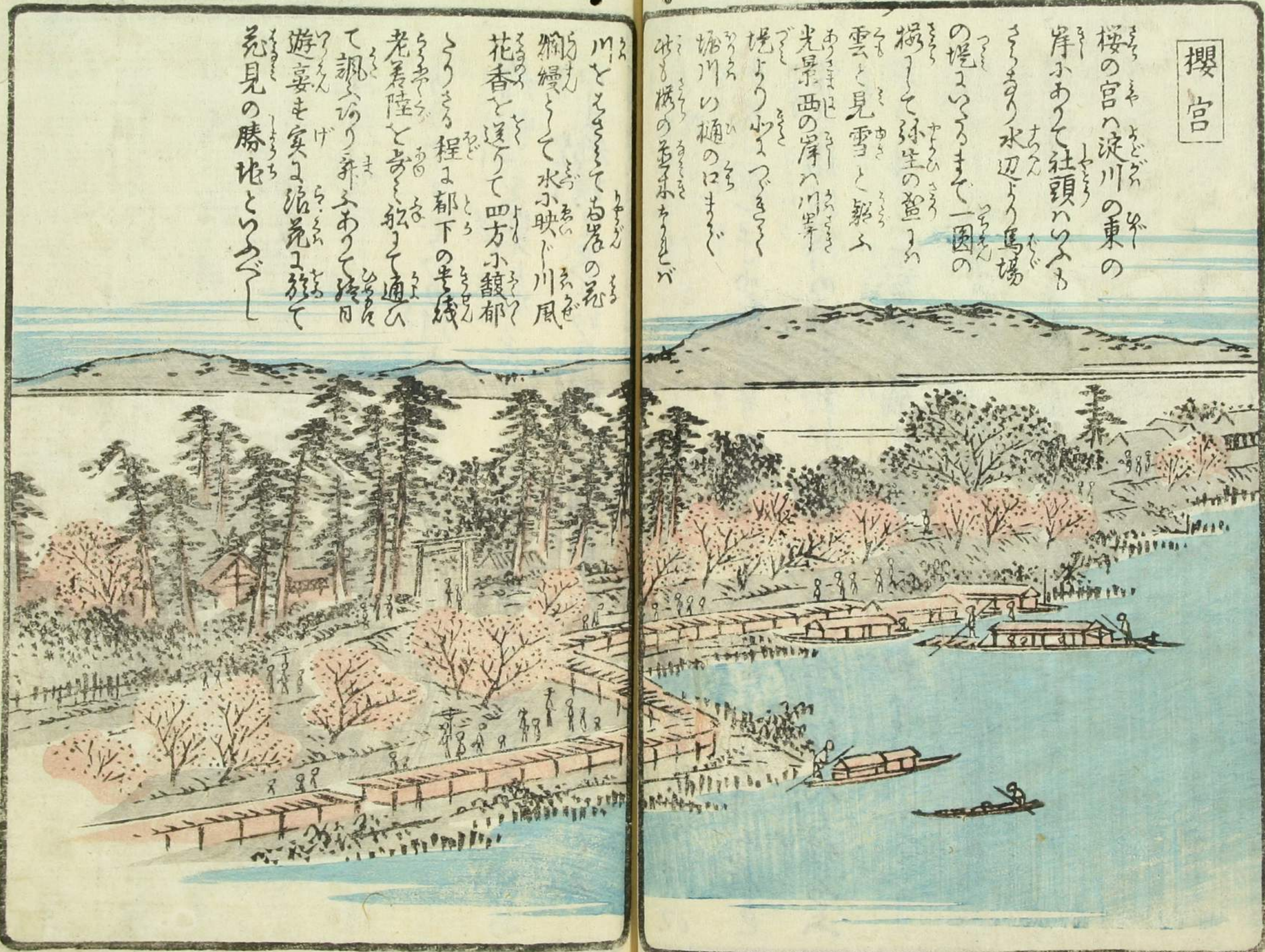
右同前小あり境肉小鯉塚宿紀あり付物小鯉の奇鱗

何れ是より北へ堤づゝひりて攝宮小いりて凡ニ町并あり

櫻宮

櫻の宮は淀川の東の  
岸にあつて社頭へつゝも  
さうさう水辺より馬場  
の境よりまで一園の  
桜して社生の益より  
雲と見雪と解ふ  
光景西の岸へ川岸  
堤より少くもつゞき  
堀川の樋の口まじ  
水も桜のさきはるかに

川とさうさうも岩の花  
猶曇くして水小映り川風  
花香を送りて四方小籠都  
とつゞき程は都下のまじ  
老若陸とさう船と通ひ  
て潮のつり弁ふあつて後日  
遊宴ま宴は流花に於て  
花見の勝地とつゞき



社頭

櫻宮つばきのみや 酒馬のさけうま 新糸天照皇太神あらたにあらたまひて 例糸九月廿一日をり

當社あたらし 旧野田ふるのの 小橋故大和川の堤宇と櫻野とさくら の所ところ 是也

後世あとよ 世不後よご 故ゆ 旧地ふるち の名な とみも 櫻野宮さくら と号なづ せし づく の

一が社頭やしろ の傍そば 不教ふしやう 百株ひゃくしゆ 櫻と植う けけ けけ 今いま の櫻さくら の宮みや と稱なづ せ

苑えん 由ゆ 号なづ けけ けけ 如ごと くく するる も新あらた 網名あみ 詮せん 自性じしやう するる べべ 一ひと 又是また

より十丁じゆ ぶぶ かりかり の川がは 上かみ 小母恩寺おぼん とと 女僧寺にょそう 一ひと 危あや 候う 常じやう 小

綿わた 帽子ぼうし を製つく りり 頗おほ るる 光あき 養やう と名物なぶつ 之の 當寺あたらし の北東きたひがし なる田圃でんぼ 也

中なかつ 一ひと 鶴つる 塚づか とと するる あり頼政よりまさ の射い 箭や 一ひと 化け 鳥とり と埋う めめ むむ 所ところ と云い へ

鴨野鴨のの 辨天祠はんてん 鴨野鴨のの 全ぜん 協ぎあ の良よし 小こ 京橋きやう の南みなみ 筋すぢ 鐵てつ 御門ごもん と東ひがし へ

ぬけ鴨野ぬけ鴨のの 橋はし を渡わた して糸いと 結むす りり 靈れい 驗げん ありあり して諸しよ 願がん 成なり

執と 事じ して俗ぞく 人ひと 常じやう 以も 間ま 割わり するる 別わか けて月つき 毎まい の己おの 日ひ 一ひと 六む 老らう 若じやく

群ぐん 奉ほう して初はつ 念ねん と敬けい びび くれくれ と信しん 不ふ 己おの 操そう 治ち といい 其その 終しゆう ぐぐ 一ひと 所ところ

おのおの 一ひと 異い ちち して忠ちゆう ありあり 孝かう ありあり 又また 病びやう 苦く の平へい 念ねん と祈いの るる あり

或ある 一ひと 利り 欲よく 色しき 欲よく ありあり 得え 手て 傍そば なるる 於お 靈れい 小こ 神かみ も圍かこ らら せせ るる べべ

るる べべ 一ひと 又また 社しゃ 頭あたま より東ひがし の方かた 左ひだり 専せん 道みち の不ふ 動どう といい 其その 後あと 藤ふじ

山友さん 三さん 寺じ と号なづ けけ 本尊ほんそん 不ふ 動どう 明王めいおう の御利益ごりやく 益えき 掲か 焉や して日ひ 毎まい

系流絶び殊更正月廿八日の初不動とて群集せり

猫間川 金城の東より平野川と合流して鴨津橋の下と通じ 後世此川條々づのれ通船自

田ろくごりしが去天保八九の年間 御仁惠ふよろく川幅を

度ろく底深く溝へあめふよろく船の往返ふのまろくやして

便宜あると甚しき程よ此流小橋を架し居る新小家

作し或は花紅葉の樹楮棠茅萱の類を植て春秋好美

観とけ又此傍小朝日菴とてろくありて清正公と結糸に

御利生新とるろく系流多

森宮 栴間川の傍にあり 所系用明天皇 人皇 初て聖徳太子の

御文帝より日本紀に推古天皇六年夏四月鵲二喉を難

波の杜小養もむとろく則此地ろくとて攝社末社境内ふ

多し亀井水田趾蓮如上人祈松とてろく大樹あり

杉山 森の宮の 此地の金城の藝の方ろくて松の大樹繁りしとる

四面の眺望殊更に風景よき故春暖の頃浪華社貴賤

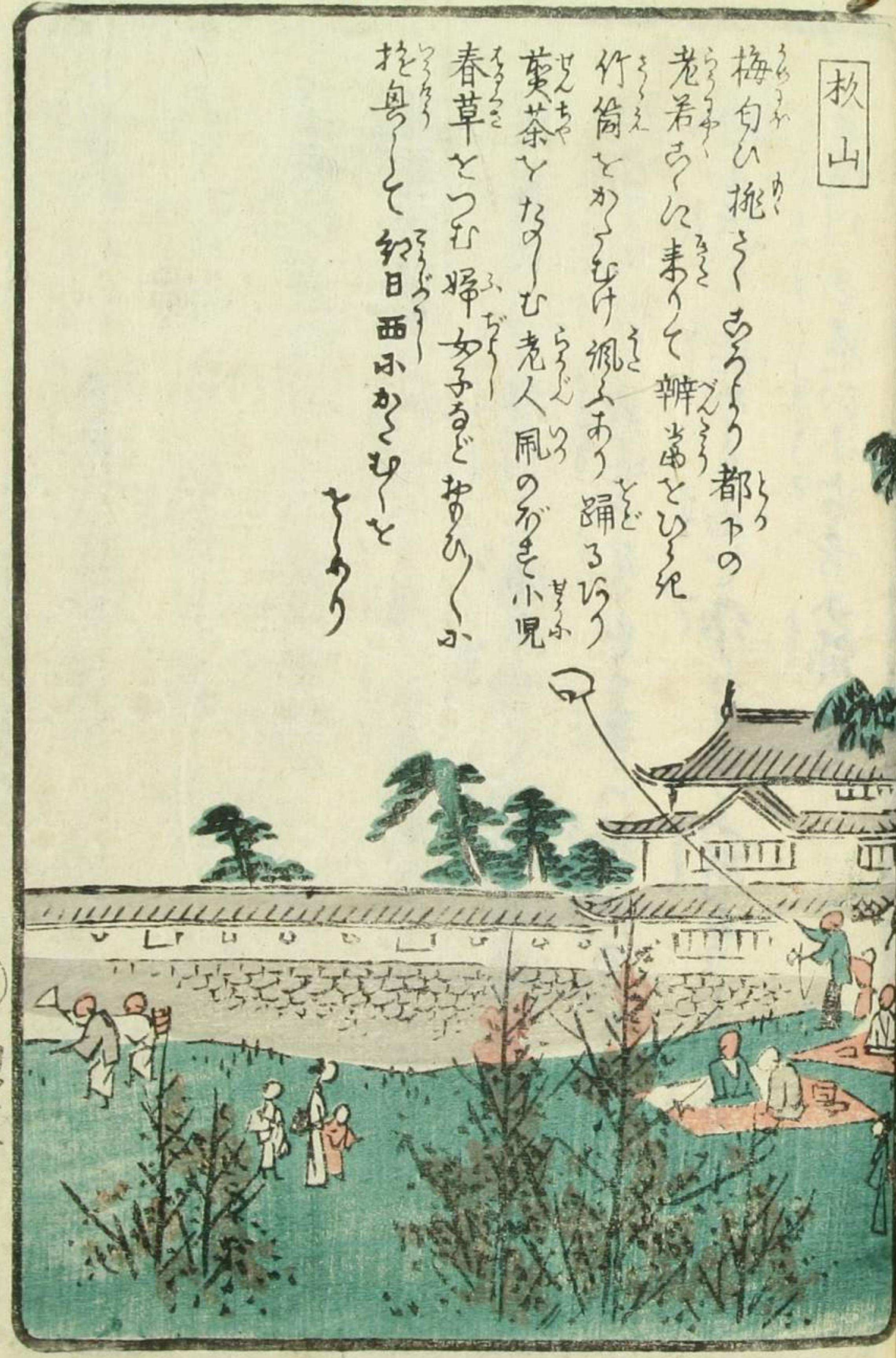
あはれ来つて遊宴に別て衣更着初年の日の老若群

集のく最ふとて

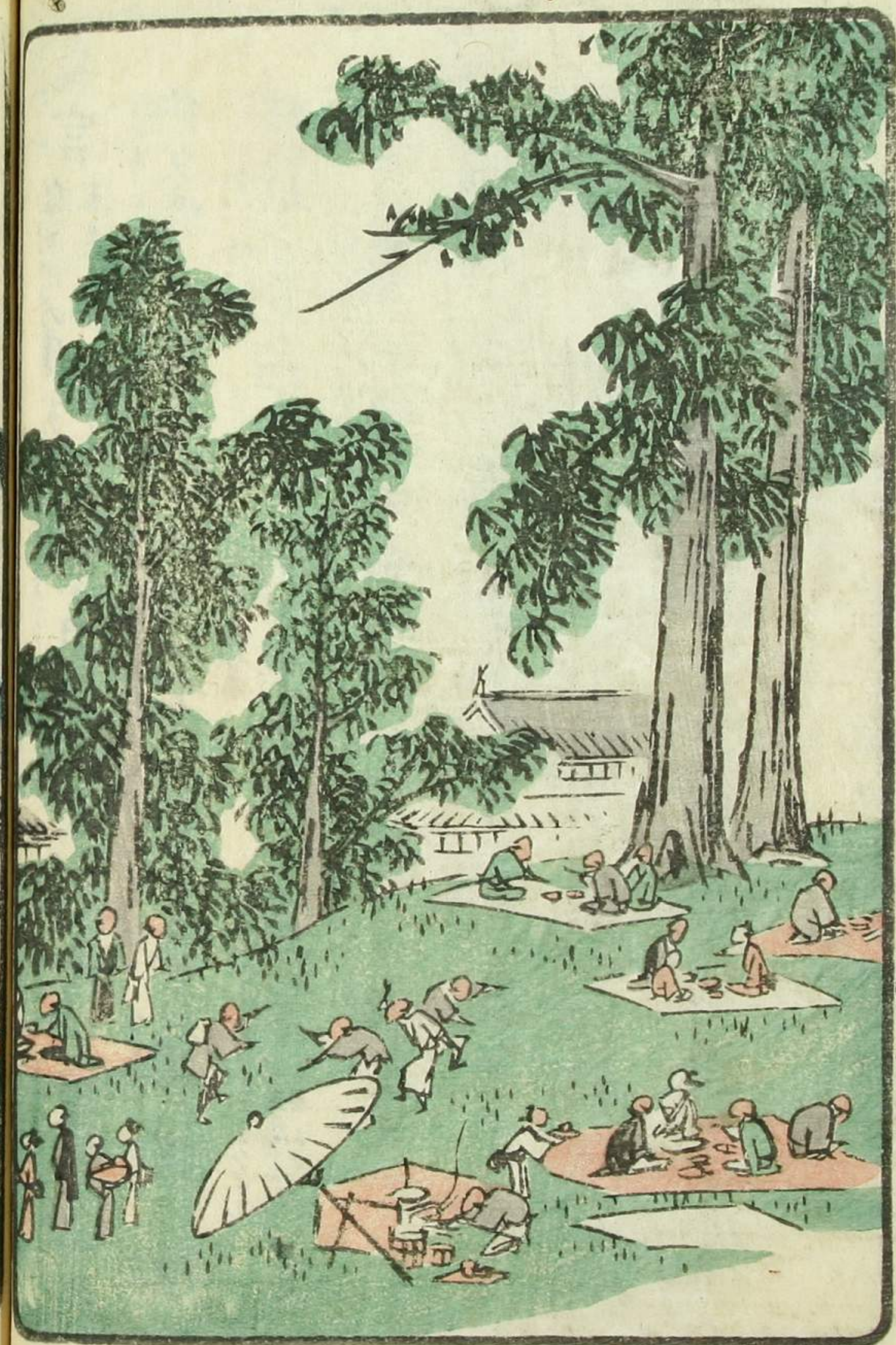
秋山

梅白ひ挑うあうり都下の  
 老若あひまうりて辨あひひ死  
 竹筒をかてむけ楓ふあう踊るひう  
 黄茶となりむ老人風のなき小児  
 春草とつむ婦女子をどおひひか  
 控身とて初日西ふかむと

とまり



刀  
七  
一



ネ  
ナ

梅の薬師 梅山の 本尊石薬師境内小紅梅の大樹多し二月苑の

盛る風流士あは来つて風馳と受け

豊津稻荷社 梅の神あり 系神倉稻魂命やかく入五十一代垂仁

天皇十八年の勅請あり信ふ玉造の稲荷と号し本社の後り

舞臺ありて世洲より東の山へ眼前小連うて風景斜る

び凡て世辺と玉造と号する事ハ神代のむろ玉屋命也

地は終く始め玉と作らせり所ありと玉造也 太子傳

玉造川玉造のホ古号小孫なり

宰相

二丁斗あり 豊津のりの 信ふ真田山と元和の頃ま田代

装ふの育しと社説入宰相山と入京極宰相俊の陣営

世辺小育より期号くるなる金一扱ま本殿ハ仁徳天皇と

あり稲荷神ハ本社の後小知清江其奈末社件多あり畧之

就中三光宮とつハ奥列青麻ハ在せる神の遥拜ありて

世ハ新誓とかり者ハ中風の病冠と除せり入とて病を原

より病ざるも其冠と脱きん事と解ひとまると運ぶ終ら

多し凡と此地ハ一准の五山ありて東の方と見るとせば比叡

三軒茶屋

此地ハ玉造の街端にして  
 伊勢系宮大和巡マ大軍  
 詣ホの送別の場所なる也  
 左右ハ酒肴をひらぎ  
 系店あり故ハ新ハ号け  
 ころりる程ハ弥生の初旬  
 より難波菅笠一掃ふるも  
 連々伊勢人頭あり



別々の酒肴系解り出  
 りり這入あり或ハ好瑞子  
 休むもあつて嬉々きき  
 言ぞりりる  
 其上平日とクも亦  
 街道の往還されハ旅人  
 の通必絶る向う亦  
 信支心ハ毘沙門生駒の聖  
 ホハ月番の信者ありて  
 るの系店と休足所と定む



乃七三

神十九



山の高根不續きて漸々小南に連り生駒掠々巖信貴の山二上  
嶽金剛山より葛城の山へまで一眼不見へるまで此の  
る光景なり

圓珠菴 東三津嶽 此地ハ契沖阿彌梨の遺蹟なりて庭中ニ墓

碑のり碑文ハ五井蘭列の撰なり 其文師ハ國學と博く和書

數篇と著して世に著し知る所なり元禄十四年正月廿五日此の

於て寂以年六十二ある戌年百五十年の忌よ書れり風流の

好士追悼の和歌と遠近に勅進して吳都小を向られぬ

味原池 小橋村の一名比賣古曾神の御影池と云ふ古歌より味原の

池味原の堤より味原御牧 延喜式

産湯清水 味原池の大小橋命の産湯の水と云ふ名泉ありて清徹

外不遠き四時よりの酒さるる味原珠は甘味さるる五の上より

稲荷社ありお五と法藏山と云ふは地ハ初めは賣古曾社の旧地

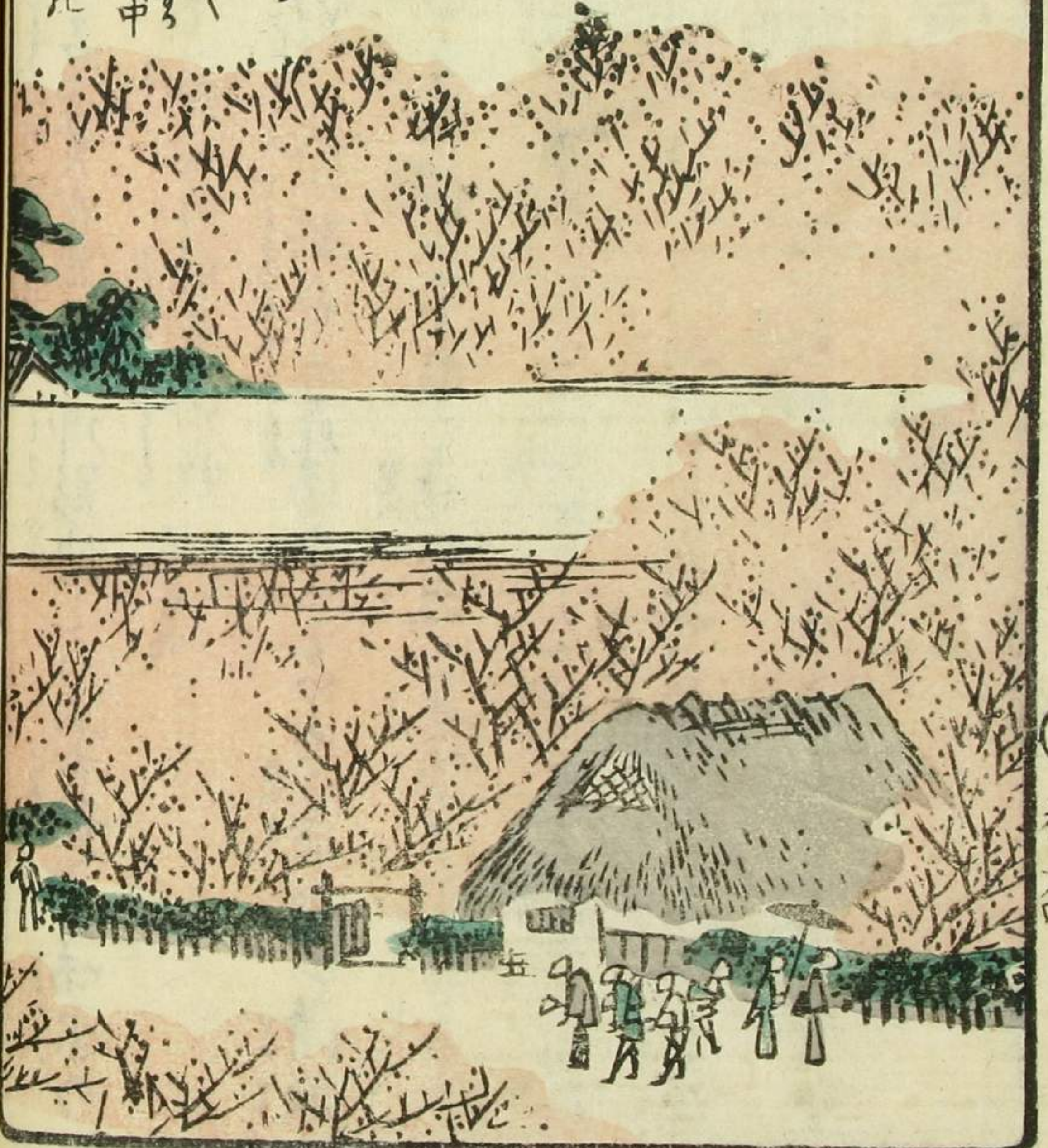
ありしと今尚神主の宅ハおふあり比賣古曾社の足より東の

方おあり却ては辺ハ一園ハ桃畑ありて弥生の初旬花の頃より

老翁男女より群る野徑は元禄に

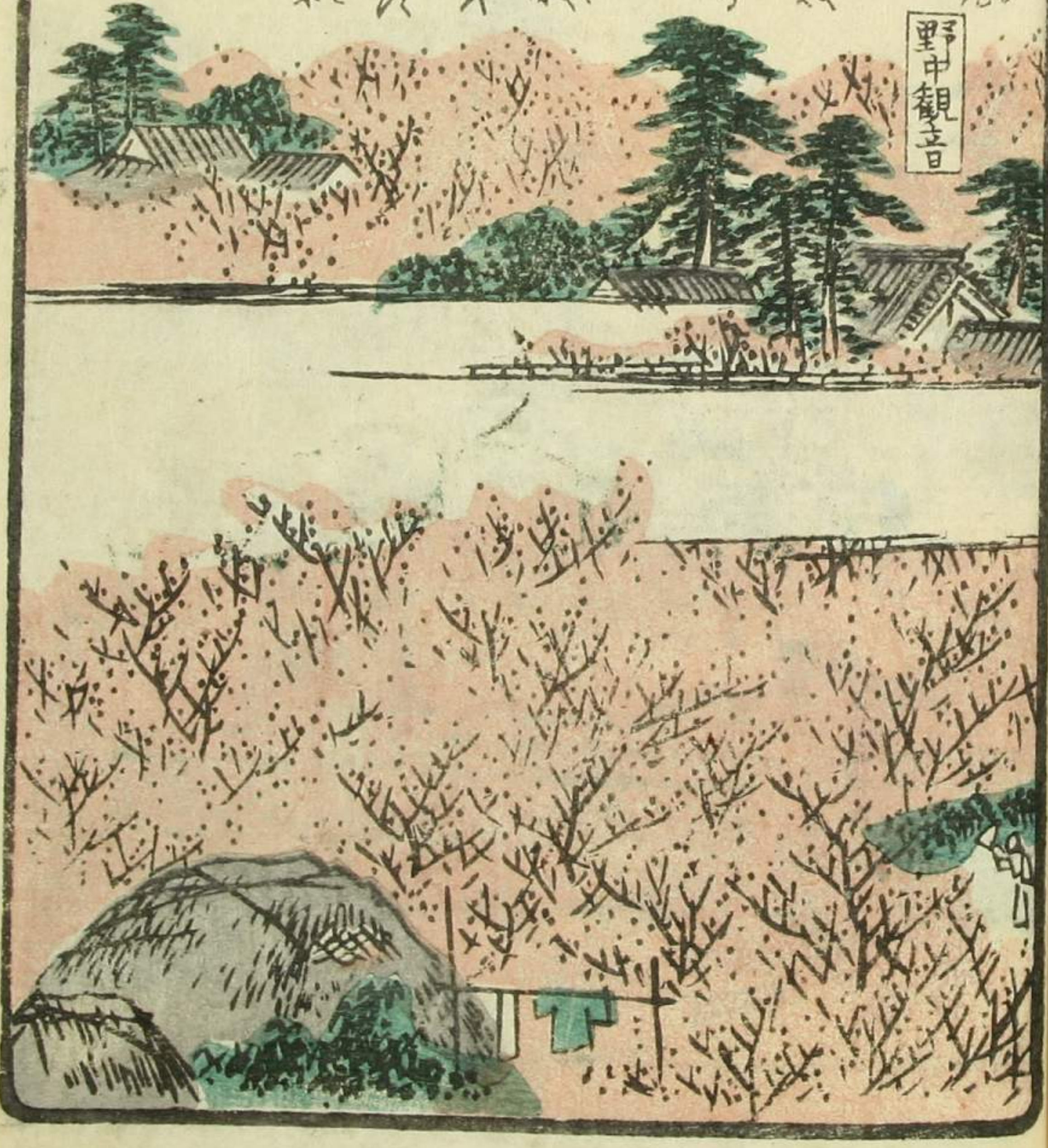
野中観音

玉造小橋の辺より  
 天王寺までの間凡そ  
 一畝の桃畑をれば野中  
 とつる地は全く桃化



最中よりわひ白ふ花  
 の感うらん天も破る  
 光景よりそれバ物のぬ  
 苑の下と人の口と休ひ  
 てゆくものしくお魂ひ  
 つまらぬや靴や花の枝  
 うちうちげらるる葉  
 彼松原の仙境のさき  
 其一時の葉花こそ千葉  
 も延る心休るるべし

野中観音



寶樹寺



初  
廿  
五

當寺の梅や花の山

して東高津より

本堂の後北方僧坊の

庭前、楓の大樹、数林

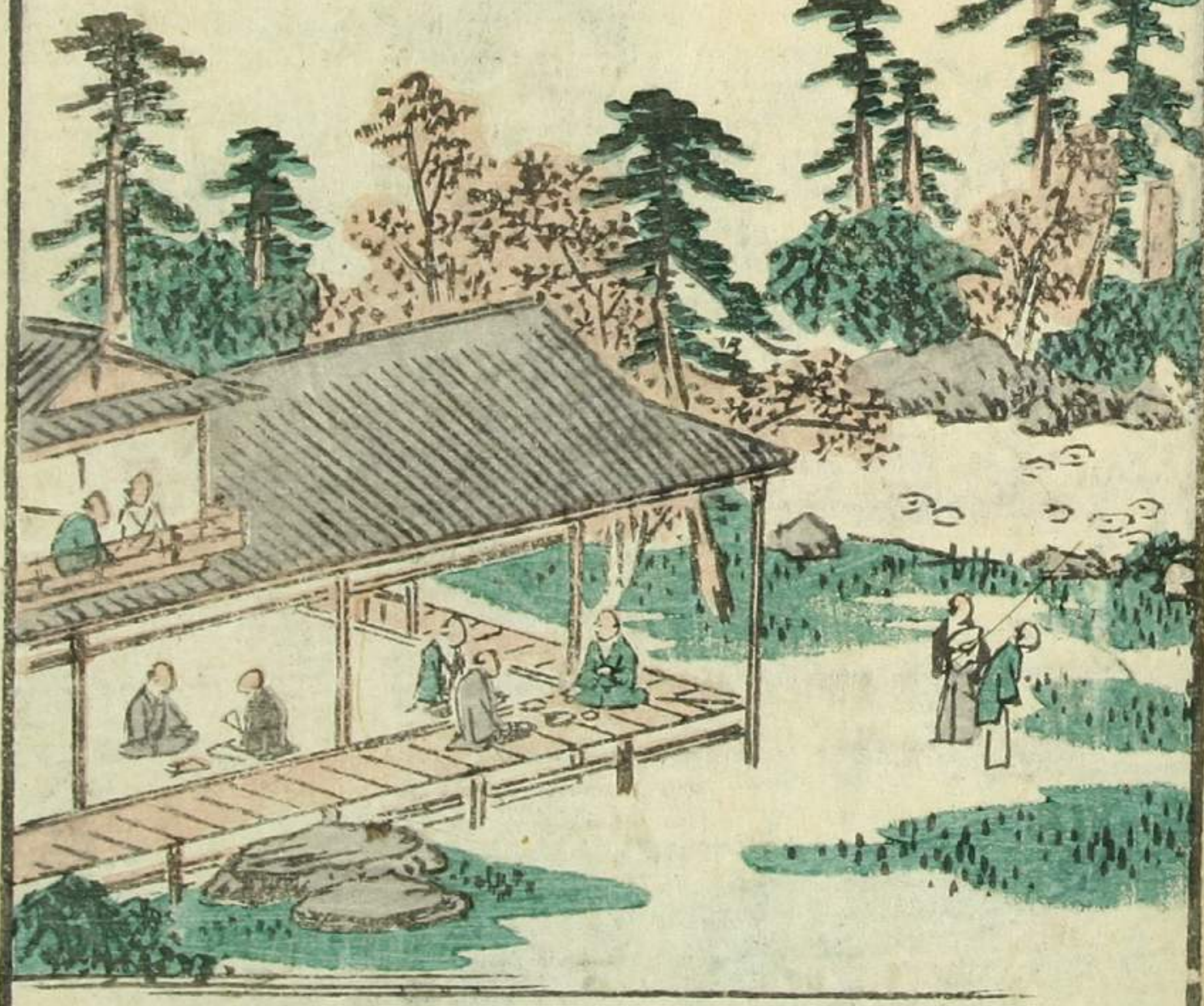
あり、紅葉の頃、詩哥の

雅客競ひ来つ

遊樂の尚林泉の

風景よ、一しゆれ

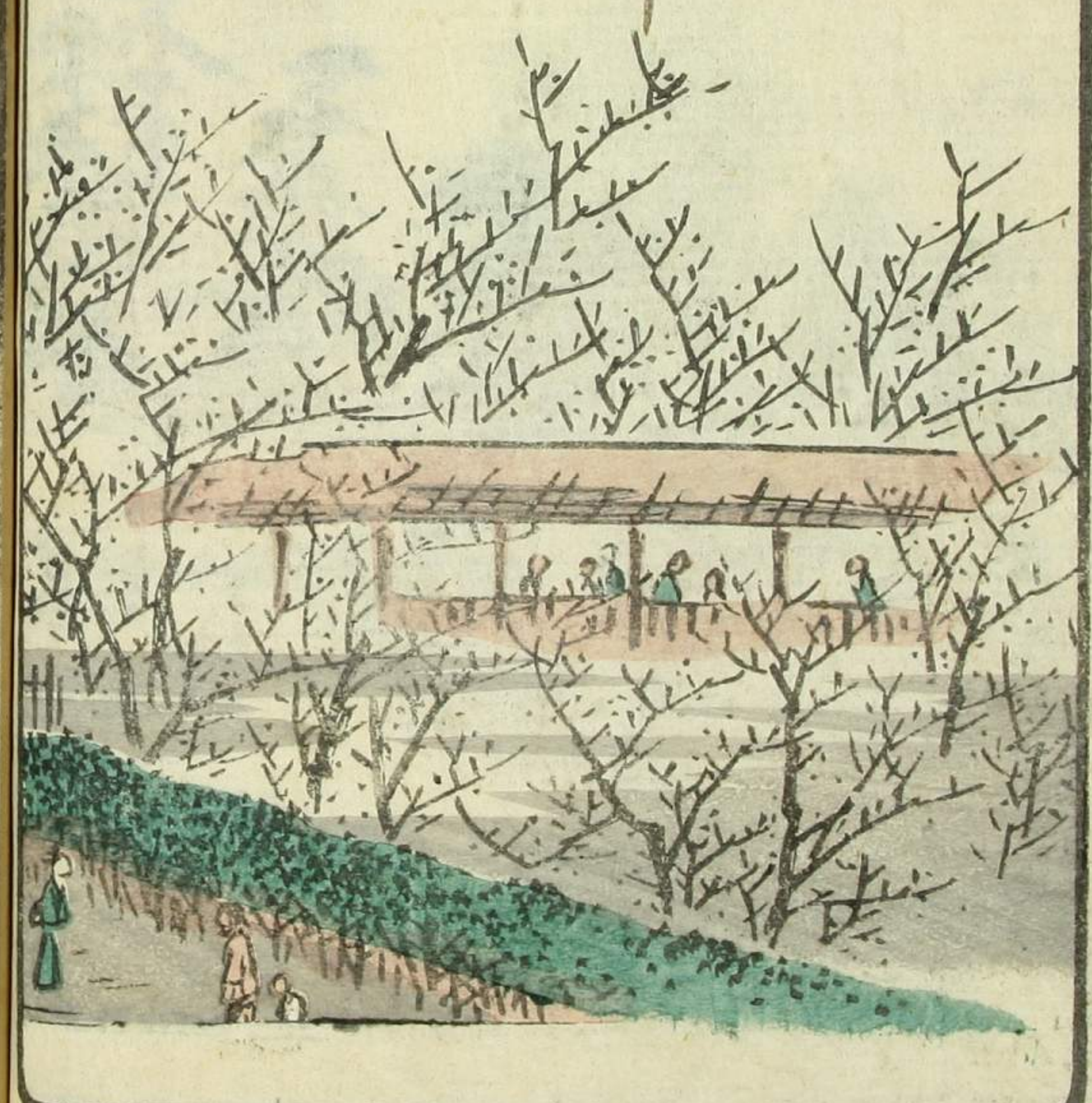
眺望より



初  
廿  
五

梅屋敷

此地への宮より乾の方へ  
 して生玉馬場前の末へ  
 あり園中小敷株の梅と  
 植つる樹下小席と設く  
 ころ程は如月の花は吹雪  
 清香や方ふききり道  
 び人も唯は過ること  
 得ばゆりより月夜に  
 好士もひききり  
 遊観は又花下より



過りて長月の  
 花壇より  
 るか  
 美景なる  
 此梅中  
 亀戸  
 文化初年の頃  
 これと  
 撰り



野中観音 産御の御所の 寺と遍明院と云々本尊十一面観世音と

和列長谷寺の奥儀と同本云々悪七長湯景清の守り本尊

あるよう 信小田寺と雅波寺と云々説詳あり

上之宮 野中の 所系欽明天皇と云々社頭ニ檜茅萱ホ数株あり

て春秋美景るれば衆人群集云々

北向八幡宮 生玉の門前の 天正慶長の年間城中の諸士此地に於て

射淋の習古と云々より子矢林と御清と云々今忠五月五日に

流備馬の儀式行つてハ佳昔の遺風云々此名も今に傳あり

と云々北向の御城守護の謂るりと云々

金毘羅祠 八幡の前ニ傳是の南 當寺の鎮守ト云々

人群とるせり本尊の聖観音云々長三尺五寸飛彈内通の

作と安置ありと云々

辨財天祠 生玉の前の 傳云々海中より出現あり云々

社頭ニ蓮池あり云々夏日より紅白の花咲きて美観ナ

生鬼神社 馬場前の 平面云々と云々生魂命大國玉命云々延喜式

石も在り岩町の是なり

生玉社

本社の後辺の舞臺  
 西の方と遙く見ると  
 市中の万戸の薨の波の  
 いく河口の帆柱等々  
 繋ぎの似たる洋々  
 滄海に千船百船の出へ  
 白帆の光景けふ類ひるれ  
 眺望といふべし  
 又社頭小楹本多く弥生の  
 幽艶斜るは門前の池  
 夏蓮の花紅白と



まいて咲乱と  
 荷葉の白ひ  
 四方小  
 芳し



眞言坂

生玉の社僧ハ貫首南坊と

大御余九院あり故ハ

是と十坊といふ

此坂と上れば左右

おのく寺院あり

悉く眞言宗

るる中ハ

新の号け

その一なるがせ

ついでと大師の

御影堂ありと浪花



初子

大師めづりのれ所  
 あり就中坂とよる  
 左の第一と橋本坊と  
 りひて此寺内ハ秋葉権現  
 の祠観音堂ホあり  
 諸人殊ホ多し



三

日生國魂二座ト云社頭ト云末社許ト云河内本地堂の本尊ト云  
薬師如來ト云として聖德太子の御作ト云と河内大師堂の本地  
堂の左ト云並ぶ歡喜天の宮ト云北の方ト云あり迎世本社ト云の後  
迎ふ舞臺と建宮ありて瞻望一ト云ぬあり

高津社西高津所系仁德天皇ト云として往古高臺の皇居ト云の余  
風と摸ト云せりト云も大宮所の舊地ト云今の御城ト云の辺ト云ありしト云  
天正年間豊公其地ト云府城と築ト云ありト云より神社とト云す  
遷ト云しト云境内に攝社末社ト云高臺の頌碑ト云

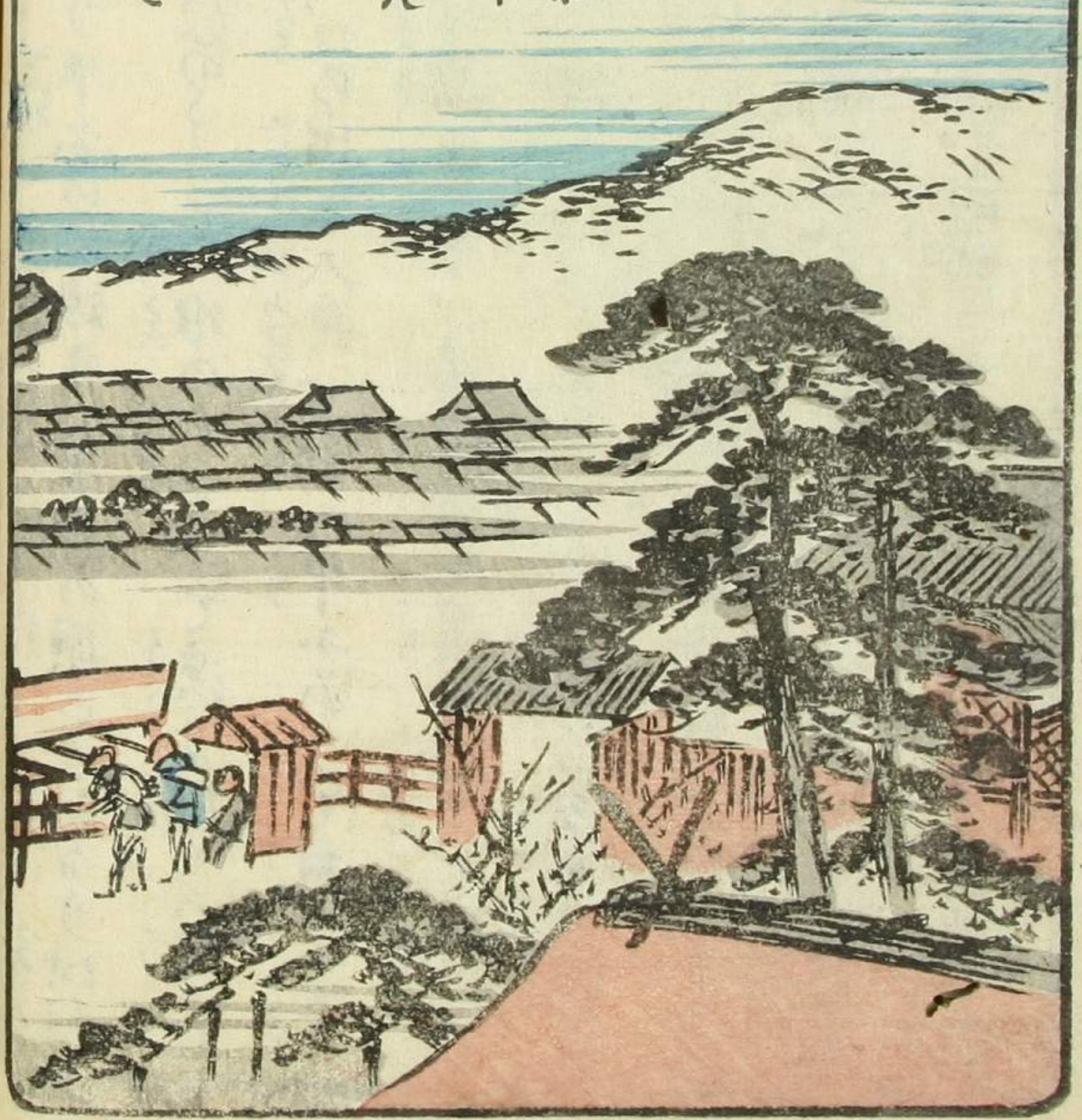
本社の西傍より平安の茶煖彦章甫の撰ト云とる所ト云あり社  
頭ト云の道頓堀ト云の東ト云ありて一准ト云の丘ト云ありて遠ト云眺ト云めト云る  
の市街ト云とあり河川ト云の出船入舟一瞬ト云の中ト云ありて風系ト云  
一の勝地ト云あり鳥居傍ト云の帯ト云に遠眼鏡と置ト云て諸人ト云と悦ト云む  
しむ茶店の湯豆腐ト云の世ト云に名ト云あり石階下ト云の植木ト云あり  
四角ト云も花絶ト云び殊ト云小牡丹ト云の花ト云壇ト云の比類ト云あり美觀ト云あり  
宮前の石橋と梅の橋ト云とあり流ト云とあり梅川ト云とあり号ト云あり浪ト云花  
津の梅ト云よりこのものト云なり此橋ト云の下ト云瑜伽社ト云あり寺ト云と自性院



高津

遠眼鏡屋の云

まが最初正面目と云ふまうら  
 石んがりの傍くより芝居  
 六つひのこ織ひ入の若川  
 天保山入りの物うひのけ  
 衣の摩耶山武庫山甲山  
 あり町く東西の御堂丸の  
 ろんは鉄眼今宮のそびと  
 まが川白千本松の風水

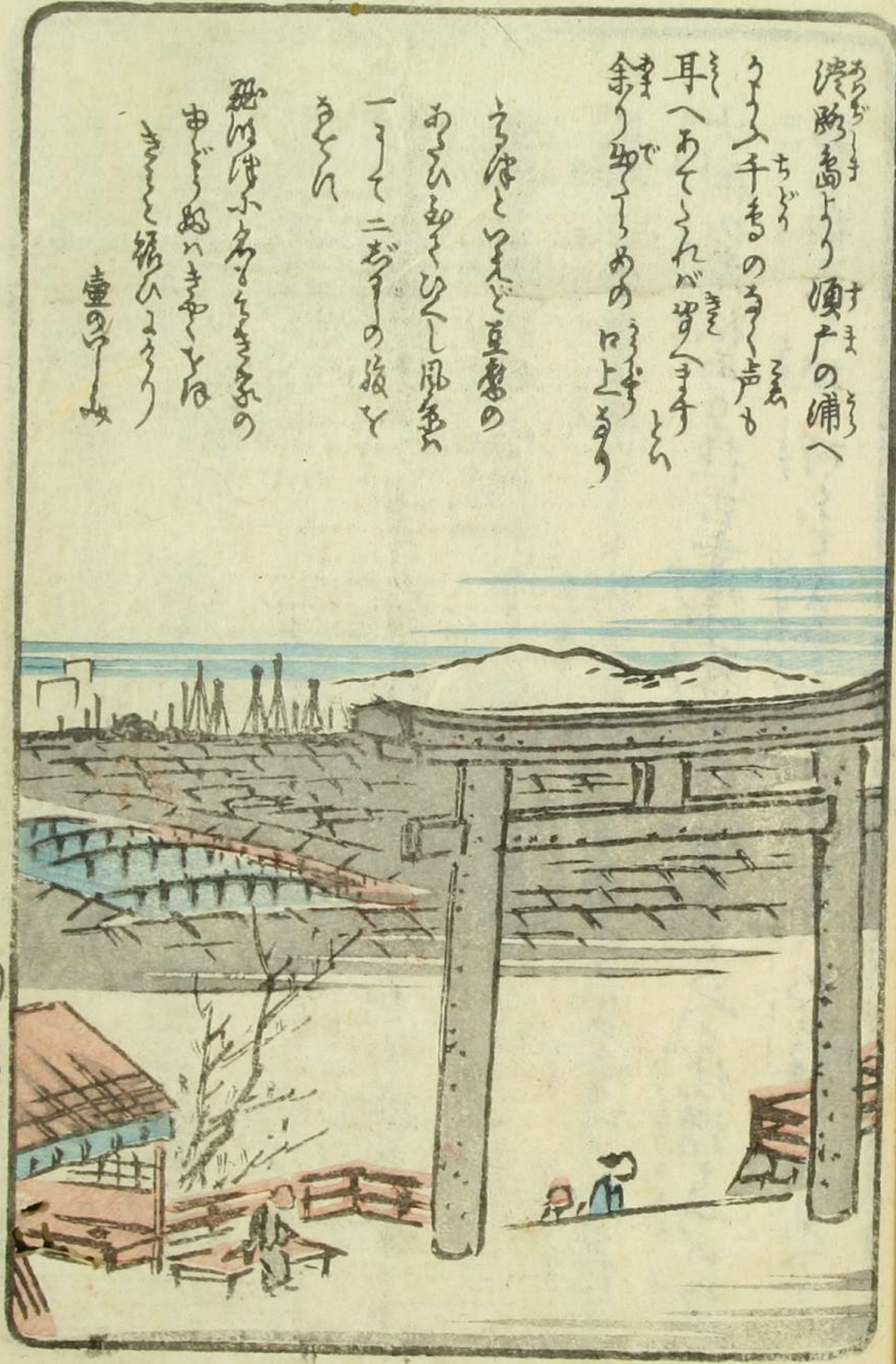


淡路島より傾産の浦へ

うら千巻のうら声も  
 耳へあてられがきき  
 余り物うらめのは上り

ちやんといえど豆巻の  
 めいひあていし風巻の  
 一して二ぢすの夜や  
 きん

舟のけふなまのまの  
 申しぬいませくは  
 きんてはひのうら  
 壺のうら



といふ卅三所の観音堂金毘羅祠ホあり

頬焼地藏尊

谷町より地蔵坂の角 常尊の慈覚大師の作かし

て往昔婦人の命おかり焼鐵の籠と救うをまふ靈佛より

妻くハ縁記を見へり故ふ世は身代頬焼の地藏菩薩と

賞し常の諸人間あり頗る美駭ゆたなりとぞ

又此寺の東隣に願生寺といふ浄土宗の寺あり此寺内ハ

大樹の老松あり往古寺院建営の時起誓といふ住僧ちの靈

妻と抱ひて植る所とぞ今益々繁茂せり妻の形若瀧集見へり

又此東向ふ妙法寺といふ日蓮宗の寺あり此寺ハ大樹の

松ありて境内ハ繁茂し尚門外ハ松のむせり其美觀なるを

尾上宮の松も勝るんを西幹圍二丈二尺枝数九十五有三丈九尺

余徑東西十丈七尺全南北八丈九尺日野資枝公の御歌あり畧之

茶湯地藏

農人捨てて百間 石造りて長二尺許祈念の者茶湯と

供じ且茶湯と清く蒸湯より加へ或ハ脚める所ハ塗ハ必らび

平釜はといふ別て乳の出る婦人これと喫し月代と嫌ふ

小児これと塗ハ直ふ其駭ありとぞ

編輯

鷄鳴舍曉晴翁



畫圖

案川半山



備筆

鎌田醉翁



○此書の遠近の諸客流先遊覧の役宜と本々一に故郷への家土を不  
 り給へ料少して荒まゝと著以のあり原未其行方の  
 順路とつづらそ一巻とるぬきど行程許多るれば一日よ歩行  
 かゝれば高麗橋より始め天濠川等向うに橋の文網高  
 御城に迎りふむまば一日の遊観事たるべし而して又の日に遊の  
 迎りたるまゝま田心味原池を湯橋平に及びび生玉津の迎り  
 中ほど一日として可なり為次の日順路の第一第二篇を伴ふ著以べし

安政二乙卯案四月發行

東三條通伊香所

吉野屋仁多所

江戸日本橋通武丁目

山城屋佐多所

大坂今富橋筋小久多所

河内屋甚多所

書林

